

巻頭言 「ベタニア」

宇野 元

「オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニア」(マルコ 11, 1)。ベタニアは、エルサレムの東側にあります。浅い谷(かつては深かった)を隔てたオリーブ山のなだらかな斜面に位置していて、人々はここを通過して、目の前に聳える都への坂道をのぼりました。福音書は、イエスと弟子たちの入城の様子を印象深く伝えています。多くの人が迎え、歓呼しました。

「ホサナ。

主の名によって来られる方に、

祝福があるように。」

(マルコ 11, 9)

ベタニアは、イエスが死を迎える最後の時期に、親しく立ち寄られた場所として記憶されます。エルサレムに入城されたあとも、イエスは城門を何度か出入りされました。マルコ福音書は、この場所でなされた、ひとつの出来事を伝えています。イエスが滞在していた時のこと、無名の女性が非常に高価な香油をイエスに注ぎかけた。この行為が、福音の宣べ伝えと共に語り継がれることとなりました(マルコ 14, 3-9)。

弟子たちの何人かが立ち上がって、モラリスティックなお説教をします。「なぜ、こんなに香油を無駄使いしたのか。」高く売って、貧しい人々に施すことができたのに。もっともなことです。そうすることができたでしょう。私たちがモラリスティックに考え、行動することは大切です。しかし、他者を批判しようとするときには、注意が必要です。自分の物の見方は狭い場合が多いから。思い至らないことが多いから。あとになって気づくことが多いから。彼女がしたことは、弟子たちの批判を超えています。主の名によって来られた方、イエス・キリストによって私たちの世界に与えられた恵み、その無限の貴さを証ししています。主は自らが犠牲になることを引き受けられた。私たちのために。

コロナ禍の中。困難な状況下で、「力と愛と思慮分別の霊」(2テモテ 1, 7)により、主日の礼拝を捧げるよう努めるのはなぜか? 一人一人、思い巡らすよう導かれていると思います。「なぜ」と問う、自分の心に対して答えることが必要でしょう。また、「どうして」と問う、他者の声に対しても。ベタニアの無名の女性が、私たちの思い巡らしのために立てられています。